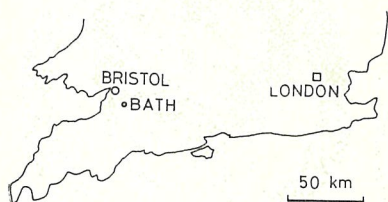


バース(イギリス)



大 鉢 忠

家路を急ぐ田んぼ道、星空を見上げながら歩くのが常である。時間によっては点滅する赤と白の光が、次から次へと、一分ぐらいの間隔で南東の空に消えていくのを見かける。

青空に白い雲を作りながら飛ぶ飛行機とはちがって、星の間を飛ぶ飛行機は私をヨーロッパ、アメリカへと運んでくれるのである。

三年ほど前になるが、私学研修福祉会の補助金による在外研究員として、滞在したイギリスでの印象を紹介させていただく。

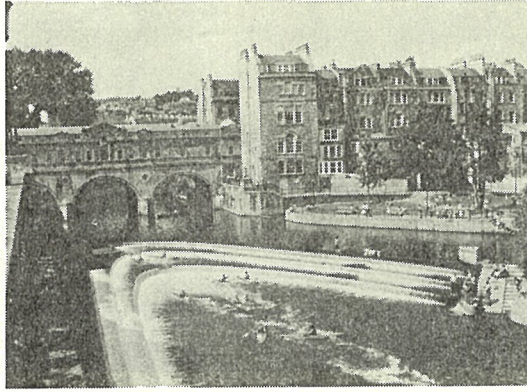
イギリスはバース、ロンドンから西へ約百五十キロメートルの所、M4という高速道路を車で、あるいはインターシティと呼ばれる高速列車で約三〜一時間で行くことができる所にある。イギリス人やアメリカ人に向って「バースにいた。」と言えば、ほとんどの人がその名を知っていたり、自分も行ったことがあり美しい町だったという答が返ってくるほど名の知れた町である。地球ができたころより温泉が湧き出しており、約二千年前のローマ帝国支配の時代には温泉のある保養地として栄え、また十八世紀のジョージ王朝時代にも再び栄えたという歴史ある町である。市の名前も温泉・風呂から来ていることは容

易に想像できるが、人々はバスと言わず、バ・にアクセントをつけてバースと呼んでいる。

バースは観光地であると同時に大学の町でもある。バース大学は丘の上にあり、広いキャンパスに恵まれた勉学条件、日本の大学とは別世界の感がした。例えば、学生数三千名程度に先生が約三百名、約三分の一の学生はキャンパス内の寮に住み、学生のほぼ全員が生活費も含めた授業料全額支給の奨学金を受けていること、私も含めて多くの外国人留学生、研究者を快く受け入れているといったことなどである。

バースでの見どころは、ローマンバースと呼ばれるローマ時代の風呂跡である。バース聖堂を建てるために地面を掘って見つけたらしいが、地上は前述のジョージ王朝華やかかなりし時代の石造りの立派な建物が立並び、もう一つのバースの見どころとなっているため、大発掘をするわけにもいかず、聖堂近くのみが遺跡として公開されている。市の中心にはエーボン川が流れており、昔は洪水のたびに町が土に埋もれたらしく色々な時代の床石が層になっているのも興味深い。二十

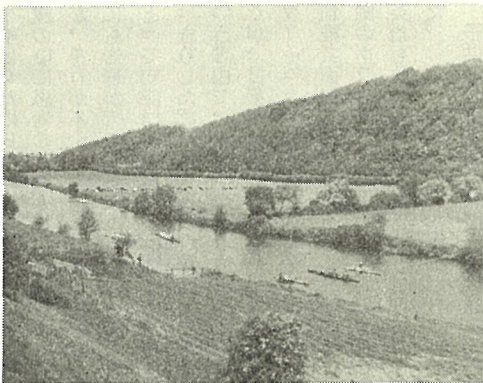
五メートルプール程の大きさの大浴場の他に、小形の円形浴場や、方形浴場がいくつかあり、お湯がローマ時代からの鉛管を通じて流れ込んでいる。年に二回ほど市の主催するお祭の際、入浴（水泳）が可能となる。お風



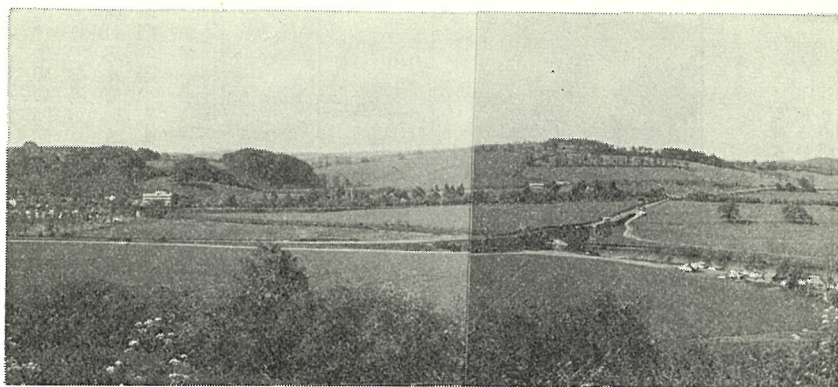
六月の午後のカメラ遊びとエーボン川にかかるパルティニー橋。この橋の上の両側に商店が建っておりこの写真からは橋というより建物のように見える。石造りの建物も特徴がある。

呂としては寒く感じるが、プールとしては暖かいぐらいである。このように文化遺産が市民生活に組入れられているのに感心したものである。これ以外にも私の気の付いた例を挙げると、平常は博物館的な役割をはたしている場所が、夜にはパーティ会場となつて、絵画に囲まれての歓談や踊りに使われたり、またクリスマス時のメサイヤの演奏会があつた。バースの中で催されたりすることがある。バースで印象に強く残っているのは、市周辺に広がっているイングリランドの田園風景とそこでの生活である。私はバース市郊外でプリストル寄りのソルトフォードという村に住んだ。ゆるやかな丘とそこに散立する大木、自然牧場には色々な種類の牛が放牧され、ゆるやかに流れるエーボン川にはカモやアヒルなどの野鳥が泳ぎ、釣りを楽しむ人、カヌーやヨットを楽しむグループ等が目につく。夏は夜の十時前まで、戸外は明るく、夕食後の散歩を楽しんだことや、村はずれにあるパブやそこで飲んだビターと呼ばれるイギリスのビールが懐かしく思い出される。ポイント（中ジョッキ程度）とハーフポイントの大小二種類のジョッキがあり、生ぬるく、少しあ

ま味が感じられ、初めの数回は口に合わないが、飲みなれてくると、もう忘れられない味となつてしまった。バース大学の若い友人に聞くと、彼は毎日曜日には、パブへ出かけていて友人達と語るそうであるし、研究室でお客があつたりすると昼食をパブでビターとサンドウィッチというケースが何回もあった。子供はパブ内立入禁止であるが、庭のテーブルは許され、戸外での昼食を家族でとることもできる。小さな我々の村にもパブが



エーボン川でのボート競技。向うに牛の放牧がみられる。



パースからソルトフォード村へ通じる道路とそれをはさむ牧場となだらかな丘。

三軒もあり、パブは人々の社交の場、憩いの場であると感じた。人々は町はずれや他の町のパブに集ることが多く、そこへはほとんどの人が自動車で行ってくる。「飲んだら乗るな。乗るなら飲むな。」の日本と異なり、道路は広く、交通量も少ないし、交差点もロータリー方式が多く、当分問題となることはないであろうが将来考えなくてはならない問題でその時彼らはどう解決するだろうかと他人事ながら心配になる。ビター以外にもロンドンのジン、プリストルのシェリー、スコットランドのモルトウィスキーといったイギリスでのアルコールに関する思い出はつきない。

小学校に入学したばかりの長男を頭に三人の子供を同伴したので、子供達の成長をながめながら、知能の発達に応じた言語習得の重要性や日本の特殊性などを認識することができた。三人ともイギリスの学校へ通わせたが漢字も少し読めた長男は、英語を自分なりに日本語に翻訳して憶えていき、日本語も十分であった末娘とその中間であった長女の二人はストリートに英語を習得していった。この差は二年後に帰国した際にも現われた。長男は一番早く日本生活に復帰したのに反し、

末娘は今だに日本語に苦労している。三、四歳の頃に思考のパターンが決まるのであろうか、それが不十分であるとその後知識習得にも影響がでてくるようである。また人間にとって知能程度と言葉とは別であることもはつきりした。それは長女が英語が出来ないという理由で、一年下のクラスに入れられていたが、言葉がわからなくてもやはりそこではカリキュラムの内容が彼女の年齢からいうと幼稚で面白くなかったらしく、途中で、同年齢のクラスに移ってから急に活気がでてき、英語も急速に上達したということを経験した。

子供達の日本語の発達は子供達三人の相互会話以外是我々両親からの会話を通じて行われた。日本では色々な場合に子供達は言葉があるいは習慣を自然に身につけているが、我々にとっては、注意して教え込まなくてはならなかった。日本からのお客さんに対する言葉づかい、礼の仕方等、イギリスの子供の間で育つ子供達に考えのおよばぬ所であった。子供達はお客さんに対し我々に用いるのと同じ言葉をつかって、何の感情も持たないであろうが、日本人である親の我々には感情的

に違和感を感じてしまつことに気がついた。年上と年下、またお客と家族、外と内の区別は日本語にもつくものであり、日本が縦社会といわれ閉鎖性が指摘されるのも現在のよな日本語を用いていることからくる帰結であると共に日本の特殊性であろう。この観点に立つと複数言語、複数文化のもとで育つた子供達は、イギリス、アメリカでは珍らしくなからうが、日本の特殊性がゆえに日本では現在問題とされることがよく分る。

バース市や大学あるいは子供の小学校への転入などの諸手続きが、きわめて簡単であったこと、旅行者にも医療費を無料にする取扱など、ロンドン・ヒースロー空港でのにやかな出迎えに始まつた我々のイギリス生活はイギリス人の心あたたまる人柄をぬきにしては語ることは出来ないであらう。

(大学工学部助教授)

フレンチマン湾のスケッチ

新島先生は八歳のときに絵の手ほどきをうけ、我々に親しい「なでしこ」と如雨露」を始め、十三歳頃までに何枚かの習作を遺している。その後文武両道の研鑽に多忙で、絵筆をとる暇がなかったためか、青年時代以降の絵は殆んど遺つていない。晩年の「伊香保風景」(明治二十一年九月頃)など僅かに二・三点である。

この絵は先生が二回目のアメリカ旅行をされた際、明治十八年七月から九月まで、メイン州ウエスト・グルズボロにあった恩人ハーディー氏の別荘に静養し、その間大型ノートページにエンピツでスケッチして、帰国後完成されたもので、縦三二・五センチ、横五〇・五センチの和紙に墨で画かれている。

二回目の欧米旅行は、先生にとって静養と募金をかねたものであったが、アメリカ到着後はアメリカン・ボードの年会に出席したり、関係者に会って、キリスト教主義大学設立の緊急性を訴え、資金援助を求める文書の作成等に多忙であった。そこでハーディー氏は先生の健康を気づかい、静養することを求めて、彼の

別荘を提供した。先生は小高い丘の上にあつてフレンチマン湾が一望できる別荘で約二カ月間病軀を癒したが、その間友人に次のような手紙を書き送っている。「空気は特に朝方新鮮でさわやかです。湾の静かな水面や耳に心地よい野鳥のさえずりが驚くほど私の心をさすめ、魅惑的に思われます。ここではあらゆるものが、ハーディーさんがいわれるように、

静寂、静寂と私に語りかけてきます。私は港から静かに出ていくイアンセ(船名)の白い帆をじつと見ています。イアンセはあたかもグルズボロがそれを放免することができないように、いつまでも私の視野から立ち去りません。そしてそれが戻って来るとき、最初は小さな点ですが、私の歓迎を十分受けられるように、疾走してくることはありません」(Life and Letters, p. 297)。

この絵には日常の激しい動の先生に対して、隠された静の先生の一面がよく画かれているように思う。

井上勝也(大学文学部教授)